最新事例：金融ソリューション　Case 102

株式会社名古屋銀行

ALM・市場リスク管理の統合を進め 金融情勢の激しい変化に対応

実績豊富なNSSOL製品で統合管理と時価開示を実現

株式会社名古屋銀行
リスク統括部
リスク管理グループ
企画役
山本 茂樹氏

株式会社名古屋銀行
リスク統括部
リスク管理グループ
係長
青木 基裕氏

名古屋銀行
Bank of NAGOYA

株式会社名古屋銀行
本店：名古屋市中区錦3-19-17
創業：1949年
資本金：250億円（2010年3月31日現在）
経常収益：単独552億円/連結709億円（2010年3月期）
従業員数：単独2023名/連結2129名（2010年3月31日現在）
グループ会社：連結子会社5社

■要件
変化が激しく多様化・複雑化する金融市場に対応するため、リスク管理を一段と高度化する。ALM（資産・負債の総合管理）と市場リスク管理をそれぞれ精緻化しながら、統合的に実施できるシステムを求めた。

■ソリューション
実績豊富なALMと市場リスク管理のパッケージ製品をそろえ、金融業務に関する深い知見を持つ新日鉄ソリューションズを起用。2010年3月期からの対応が必要になった時価開示についても、同社の製品を活用する。

■成果
品質の高いシステムが稼働し、求めていたリスク量の精緻な計測と時価開示が実現した。また、新システムには、IFRS（国際会計基準）に通じる考え方が盛り込まれており、今後の対応をイメージするために役立っている。

変化する金融情勢への対応に リスク管理の高度化を検討

愛知県を中心に、きめ細かく展開する店舗網によって、地域の個人・法人に密着した金融サービスを展開する名古屋銀行。法人融資に強みを持っており、最近では中国に進出した地元企業を支援するため、現地ビジネスを強化している。

しかし、金融情勢の変化は激しく、リスク管理の重要性は高まる一方である。同行は従来から預貸金や有価証券に関するリスクを適切に管理してきたが、金融商品の多様化・複雑化などに対応する一層高度なシステムを求めていた。

新システムの検討を本格的に開始したのは2007年である。

リスク統括部 リスク管理グループ企画役の山本茂樹氏はその背景を「リスクを一段と精緻に管理することで、これまで以上に経営計画を適切なものにすることが狙いでした」と語る。

重視した要件は、大きく分けて二つあった。

まず、預貸金と有価証券の各リスクを統合的・横断的に管理することを求めた。従来は、それぞれを別々のシステムで把握・合算しており、処理ロジックに微妙な違いがあった。それを基本的に解消する。

また、急速に進む金融商品の多様化・複雑化に対応する必要があった。オプションリスクについては従来のシステムで把握できないなどの課題があったという。

要件を踏まえ、同行は2008年1月にITベンダーへ新システムの提案を要請。同年12月には、4社の候補から新日鉄ソリューションズを選定する。選定に当たって名古屋銀行は、統合的なリスク管理ソリューションを提供できることに加え、これまでの実績やエンジニアが金融業務に関する深い知見を持っている点を重視したという。

リスク統括部 リスク管理グループ係長の青木基裕氏は、「新日鉄ソリューションズには安定してサービスを提供できる企業力があります。また、エンジニアはコンサルタントに近いスキルを持っており、当社のニーズを引き出すことについて非常に優れていました」と振り返る。

実績ある複数のパッケージを持ち 豊富な人材を擁するNSSOLを選定

開発プロジェクトは2009年1月から始まった。

新日鉄ソリューションズの提案したシステムは、ALMを実現する「BancWare Convergence」と、市場リスク管理を実現する「MarketQuants」といった複数のパッケージソフトウエアを組み合わせ、統合的なリスク管理を可能にするものだった。いずれも、新日鉄ソリューションズが取り扱っている製品で、金融機関に対する多数の導入実績がある。

ALM・市場リスク管理機能については、同年6月に基本設計を終え、10月から結合テストに入るなど、開発は順調に進んだ。

難関だったのは、2009年半ばから開始した、金融商品の時価開示機能の開発である。

同機能は、新しい企業会計基準へ対応するために必要になった。新基準は、IFRSへとつながる財務報告基準の変更の一環として適用されることになったもので、2010年3月期から四半期単位での開示を定めていた。

開発は短期間で進める必要があった。新日鉄ソリューションズは、2009年5月に発売した時価開示対応のパッケージ「BancMeasure」をベースにしたシステムを提案。ALM・市場リスク管理機能と並行しながら、時価開示機能を開発した。

新日鉄ソリューションズは、時価開示に関する具体的な方針が決まり次第、同機能の開発に反映していったという。最終的に時価開示機能について要件が固まったのは2009年の秋ごろだったが、予定通り2009年12月期のデータを基に総合テストを行うことができた。

青木氏は「少ない時間を有効活用するため、頻繁に連絡を取り合って開発を進めました」と振り返る。

こうして、統合市場リスク管理システムは、2010年3月末データから時価開示機能が、5月末データからALM・市場リスク管理機能が稼働を開始している。

■コアテクノロジー
リスク管理分野における深い業務知見、統合的なリスク管理機能、多数の導入実績を持つパッケージソフト

■システム概要
●アプリケーション：BancWare Convergence（バンクウェアコンバージェンス）、MarketQuants（マーケットクオンツ）、BancMeasure
●サーバー：Windows Server 2003×3

満足度の高いシステムが稼働 IFRS対応にも活かせるシステムに

開発の進め方に対する新日鉄ソリューションズへの評価も高い。

青木氏は「1年以上にわたって、三つの機能を開発する大きなプロジェクトでしたが、当社のシステム部門と緊密に連携するなど、プロジェクトを主体的に進めていただきました」と語る。

山本氏は「質問に対する回答や、課題への対応も早かったほか、業務知識については誰に聞いても適切な答えを得られるなど、人材の層の厚さを感じました」と話す。

新しいシステムでは、従来に比べて格段に多角的な分析が可能になっており、満足度は高い。例えば、市場リスク管理指標の一つであるVaRの算出については、市場を動的に反映できるヒストリカル法が利用可能になっている。

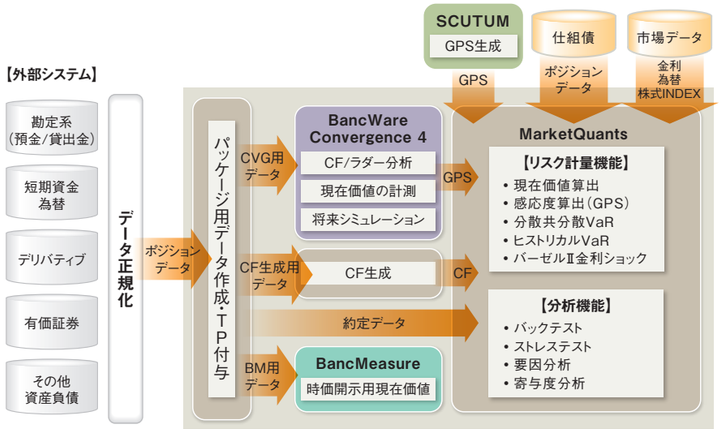
青木氏はIFRS対応という点でも新システムが活かせると語る。

「新システムには、IFRSに通じる考え方も盛り込まれており、今後のIFRS対応をイメージするのに役立っています」

今後も名古屋銀行は、経営強化に向けてシステムを活用していく。

山本氏は「次の目標は収益管理の高度化です。これからも新日鉄ソリューションズの提案に期待しています」と語る。

■名古屋銀行が導入した統合市場リスク管理システムの概要



CF:キャッシュフロー　GPS:グリッドポイントセンシティビティ　TP:トランスファープライシング　VaR:バリューアットリスク